

18 世紀綴字教科書の完成形

——セアラ・トリマー『慈善学校スペリング・ブック』

第 1 部, 第 2 部 (1792)

鶴 見 良 次

キリスト教知識普及協会の推薦図書

1788 年 9 月 24 日付けの M——夫人に当てた書簡の中で、セアラ・トリマーはノーフォークの日曜学校を視察した際の教室の様子を次のように書いている。「1 人の生徒が聖ジョンの福音書第 17 章をととても立派に朗読したので、私は、今あなたが読んでいたのは誰の言葉ですか、と聞いてみました。その子はしばらく私をじっと見たあと、本に書いてあります、と答えたのです。」トリマーはさらに生徒とのいくつかの問答を報告している。彼らは使徒信条をすべて暗記しているが、聖書中の言葉を意味も知らないままに覚え、内容を理解せぬままに型どおりに暗唱するのである。トリマーにとって、慈善によって学ぶ貧しい子供たちのための宗教教育の再生は急務であった。そのためには、こうした機械的な反復による教育を廃し、新たな指導案が必要であると考えた。¹

「トリマー夫人」(Mrs Trimmer) (図 1) は『コマドリ物語』の名でも知られる『たとえ話』(1786) などの教訓物語の著者として、あるいは雑誌『教育守護者』(1802-06) を創刊した子供の教育や読書についての保守的な批評家として知られる。トリマーが同誌で「赤ずきん」や「青ひげ」などのペロー童話を「不合理な、根拠のない恐怖をかきたて、子供の柔らかい精神を損なう」と非難したことは児童文学史でしばしば言及される。²しかしその一方で、自ら日曜学校を開き、慈善による教育活動を熱心に行ったことは今日あまり顧みられない。彼女が残した教育に関する多くの著作や教育実践についての研究も決して多くない。³トリマーは 1780 年に始まるいわゆる日曜学校運動に早くから関与し、86 年には自ら地元ブレント

フォードに30名規模の日曜学校を3校開いた。1校は年長男子、2校は女子と年少男子を受け入れた。その経験から慈善教育論『慈善の節約』（1787）を著し、ある程度規模が大きい学校でも、教養ある婦人等がビジター（visitor）として参加することで、きめの細かい行き届いた教育ができるとした。⁴ トリマーの著作においては、「慈善学校」は、広く慈善資金によって創設・運営される学校という意味で、日曜学校などを含む。

『慈善学校スペリング・ブック』第1部、第2部（いずれも1792）⁵（図2、3）は、トリマーが慈善学校教育の100年余の歴史や自らの教育実践を通して得た知識をもとに、初めてアルファベットや綴字を学ぶ貧しい子供のための理想的な綴字教科書を意図して著したものである。世紀をまたいでキリスト教知識普及協会（The Society for Promoting Christian Knowledge. 以下、SPCKと略記）の推薦図書リストに挙げられたこともあり、1820年代頃まで大量の部数が配給された。日常生活に材をとったテキスト



図1 セアラ・トリマー肖像画

によるリーディング練習が含まれるなど、旧来の綴字教科書にはない現代性が認められる。また、それらに準拠した教師のための指導手引書を出版するなど、指導法における刷新にも注目すべきものがある。本稿では、慈善学校のための綴字教科書の完成形とも言うべき同書を取り上げ、その検討を通して、大衆教育の時代を迎えるイギリスの慈善学校における英語＝宗教・市民道徳教育の特質を考察する。

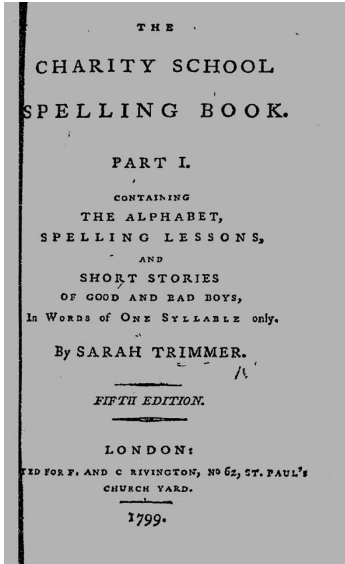


図2 セアラ・トリマー『慈善学校スペリング・ブック』第1部、第5版（1799）扉

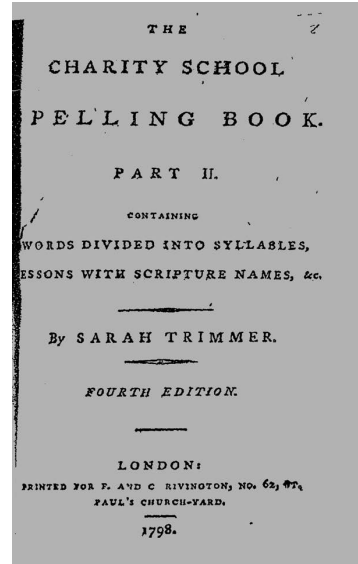


図3 セアラ・トリマー『慈善学校スペリング・ブック』第2部、第4版（1798）扉

「トリマー夫人」と慈善学校教育

トリマーは『慈善学校スペリング・ブック』に先立って、ごく幼い子供がアルファベットや綴字を理解するための本として綴字の入門書『幼い子供のための小さなスペリング・ブック』（1782あるいは1783）とその続編『幼い子供のためのやさしい学習』（1786）（以下、それぞれ『小さなスペリング・ブック』『やさしい学習』と略記）を著している。『小さなスペリング・ブック』の緒言で著者は、バーボールドの2、3歳児向けの『子供の学習』のようなやさしい言葉を用いた読み方読本を読むためにも、幼い子供に「アルファベットから語の分節へと」順を追って教える綴字の入門書が必要であると説く。『やさしい学習』は『小さなスペリング・ブック』の続編である。著者の緒言によれば、前著では練習用のテキストが十分ではなく、続編はそれを補うものであるという。これらの2冊については別稿で論じた。⁶

ところで、これらの2冊の綴字・リーディング教科書は、いずれも富裕家庭の子供を読者とするものであった。『トリマー夫人の仕事』の著者P・M・ヒースは『小さなスペリング・ブック』について、おもにそうした本を買える家庭での学習に用いられたものであろうと推察している。その理由として、同書の製本や印刷の質が高いことと、J・H・プラムの研究によれば1780年代にはそうした階層の子供にリーディングのごく初歩の指導を行うと謳う学校はほとんどなかったことを挙げている。⁷一方それは内容からも明らかである。『小さなスペリング・ブック』の読本部分に「ひどい苦しみを味わっている貧しい人々に親切に하십시오。死ぬほど飢えていても食べるものがないことさえあるのです」(118頁)という一節が見られる。同様のことは『やさしい学習』にも言える。日曜学校を見学し、貧しい子供に初めて接する裕福な子供が描かれているのである。(112-20頁)さらにはトリマーの最初の子供向け読本である『やさしい自然入門』にも「貧しい者たちは、自分たちが上の階級の人々からどれほどの恩恵を受け、またいかに彼らに依存して暮らしているかということをいつも心していなければなりません。それらの人々に対しては、羨むことなく、できるだけ敬意をもって接しなければなりません」(112頁)といった部分がある。1782年から刊行が始まるトリマーの『聖書物語』全6巻も高価な本で、やはり上中流階級の子供向けのものであった。⁸

一方、トリマーが高教会派信徒として、イングランド国教会の教義を広く貧しい者たちにも伝えるといういわば高邁な使命感のもとに慈善教育に強い関心を示すようになるのは1780年代後半からである。トリマーが地元ブレントフォードに日曜学校を開設するのは86年である。同年7月2日の日記に「先月18日の日曜日に日曜学校開校。学校に出ているために日記が途切れた。貧しい子供たちの教育に携わるのは実に面白い仕事である」と記している。⁹その翌年に刊行された『慈善の節約』は同校での体験のなかで執筆されたトリマーの最初のまとまった教育論である。トリマーの日曜学校運動に関心を示していたシャーロット王妃への献辞が付されている。日曜学校での教育の目的は「古典語、地理、歴史などのような高尚な学問を教えることではなく、聖書を読むための英語の知識、簡単な礼拝

式、身分にふさわしい行動様式などを教えること」であるとしている。¹⁰ そのうえで、教養ある若い女性たちに、日曜学校の特に女子の教育にピジターとして参画することを懇願することが同書の目的であった。その巻末には補遺として同校の設立と教育実践に関する報告書がある。同書で慈善によって営まれる教育についての基本的な考え方を示したトリマーが、さらに日曜学校の特質をより詳しく論じたのが1792年に刊行された『慈善学校児童教育考』¹¹である。

『慈善学校児童教育考』は、これまで貧しい子供の教育を担ってきた毎年の会費制寄付、説教後の一般の寄付などを設立・運営資金とするいわゆる慈善学校の歴史と現状を概観したうえで、現代の教育のあるべき姿を提案するものである。慈善による教育資金の最も効率的な運用を提案する同論の基本となる考え方は以下である。すなわち、1. 多様な環境にあるすべての民衆児童をこれまでの慈善学校だけで教育することは不可能である、2. そのため、これまでの慈善学校は将来一定の知的能力が必要な仕事への就職が見込まれる子供のためのものとする。3. 工場労働者などになる子供たちのために労働学校を、4. 家族を支えるための労働で週日に通学できないさまざまな能力の子供のために日曜学校を普及させる。(8-12頁) 事実18世紀末の貧民教育はおおよそトリマーの提示するとおりの形で展開する。¹²

『慈善学校スペリング・ブック』第1部と「オウム返し」練習法への批判

トリマーのこうしたアイデアの基底には、慈善学校の教育の現状に対する批判があった。当初から同時代まで続く慈善学校におけるカリキュラムを同じ論説のなかでトリマーは次のように説明している。「子供たちはまず、スペリング・ブックのなかの文章を使って読み方の勉強をさせられる。おもにそれらは聖書からの抜粋で、ほとんどが比喩表現を用いたものである。」少し読み書きができるようになると、もっぱらリーディングの技術向上のためだけに、新約聖書、旧約聖書の順に練習を進める。スペリング・ブックの単語表の暗記は日課である。トリマーは「子供の能力をはるかに超えた丸暗記の訓練をさせ、子供たちの理解が少しずつ進むようなわかりやす

いやり方で指導するのではなく、内容をよく考えることなく無理やり読む」ための指導を批判する。そのうえでトリマーは、慈善学校教育が当初どの程度の成果をあげていたかを知るのとは今となっては難しいが、「いくつかの明らかな理由から、今よりは効果的であったと考えられる」としている。その理由とは、1. 改革派宗教への熱意からこれらの学校の建設と運営に関わった人々は、同じ熱意をもって、その教育がきちんに行われているかを自ら生徒たちを見て検証した、2. 公開教理問答がもっと盛んに行われていた、3. それらによって、生徒たちはより多くの「口頭による教育」(verbal instruction)を受けていたことである。さらに、今でもこうしたシステムで優良な教育がなされている学校もあろうが、一方、当初の指導法にも改善の余地があると言う。(29-32頁) これらの主張は、1801年におよそ倍の量に増補され2巻本としてあらためて刊行された『慈善の節約』でも繰り返された。慈善学校で行われている機械的な丸暗記を中心とする学習法に対する批判は後の著書『新教育案の比較研究』(1805)におけるジョゼフ・ランカスターの助教法(monitorial system)への批判にも発展するものである。大勢の生徒に対して助教を用いて実践される教理問答を「オウム返し」(parrot like repetition)であるとしたのである。¹³

第1部の執筆と出版

トリマーが『慈善学校スペリング・ブック』第1部を出した1792年3月18日の日記に次のような記述がある。「先週は貧しい者たちのための教科書の執筆にいく分かを費やし、無論楽しく過ごした」。4月1日にも、1週間著作に励んだとの記述の後、「私の願いは、慈善学校のための授業を組み立てることである。子供たちが丸暗記ではなく、聖書で説かれるキリスト教の教えを実際に学ぶことができるようなものを」と書いている。¹⁴ トリマーは同年から翌年にかけて、スペリング・ブックのほか、『簡約聖書物語』『簡約新約聖書』などの子供用の読本、『慈善学校児童教育考』、教師のための手引書『教師の手助け』全2巻など、数冊の民衆教育関係の書を刊行している。¹⁵ そのためこれらの記述がどの書についてのものかは定かではない。実際に書名が明らかなのは7月16日の日記である。『慈善学

校スペリング・ブック』をロンドンのメリルボン校へ送付したとの記述に続けて、これで「慈善学校の教育方法の改善に寄与することができればどれほど幸せなことか！」と記している。それに先立つ5月9日付けでは、同校を訪問したことに触れ、「私の教育システムの実験をする機会が得られてよかった」と書いている。¹⁶ いずれにせよ、新しいスペリング・ブックは、トリマーがこのように情熱的に児童教育に関わり、執筆をしていた時期に著されたものであることは間違いない。

1792年刊とされる『慈善学校スペリング・ブック』第1部の初版はこれまでのところ見出されていない。ブリティッシュ・ライブラリー所蔵の最も古いものは99年の第5版である。大きさはおよそ16×10cmである。版元はフランシスとチャールズのリヴィングトン兄弟である。初版が出版された年は、彼らの父ジョンが没し、2人が家業を継いだ年である。父の代の60年代からSPCKの指定版元となっていた。¹⁷ 各種記録やトラクト(tract)と呼ばれる宗教的小冊子、慈善学校教科書など多くの出版物を出す同協会の筆頭の版元であった。トリマーの綴字教科書は世紀をまたいで多くの版が出された。1807年に第10版が出されている。¹⁸ ブリティッシュ・ライブラリー所蔵の最も後期のものは1810年頃刊の「新版」である。小論の筆者の手元にはSPCKのトラクトとして出された18年のフランシス、チャールズ、ジョン・リヴィングトンによるものがある。男子児童用と女子児童用が別個に出された。この段階では慈善学校というより、国民教育協会(The National Society for Promoting the Education of the Poor in the Principles of the Established Church)校の教科書として刷られたものと言える。同協会は1811年に設立されたイングランド国教会系のヴォランティアによる教育振興のための組織である。SPCKの推薦教科書は版を重ねるたびに数千冊刷られるのが一般的であり、この書も廉価なトラクトの1冊として大量に配給された。世紀転換期に最も広範に用いられた教科書の1つである。

順不同のアルファベット

まず副題を示しておく。「アルファベットと綴字の練習、単音節の言葉

だけで書かれた良い男の子と悪い男の子の小話を含む」。全 36 ページの薄手の本である。後の女子用の版では「男の子」が「女の子」になっていて、後で紹介するように、もちろん小話自体の内容も異なっている。

最初の 2 ページは 8 種類のアルファベット表である。3 ページにはローマン体とイタリック体の大文字と小文字がそれぞれ ABC 順に示される。4 ページは順不同のローマン体とイタリック体の大文字と小文字、ローマン体の子音字の大文字と小文字、最後に 6 つの母音字が大文字と小文字で示されている。創意は順不同のアルファベットに見られる。著者は『小さなスペリング・ブック』の序言で、アルファベットを ABC 順に覚えていて、その順で出てこない文字が読めない子供がいることに言及している。(x 頁) そうした理不尽な機械的記憶を廃し、その文字が語のどの位置にあっても認識できるようにとの配慮によるものである。

15 ページからの「やさしいレッスン」は 3 つの部分から成る。1. 名詞句 (15 頁), 2. 単文 (16 頁), 3. 複文, 重文, およびそれらから成るパラグラフ・リーディング (17~26 頁) である。以下に第 2 と第 3 の部分を紹介する。

第 2 の部分には 3 つずつの文が 5 群で示される。第 1, 2 群は 'The Sun shines bright.' (太陽が明るく照る。) のような S+V 構文, 第 3, 4 群は 'The Girl spins fine yarn.' (少女は繊細な糸を紡ぐ。) などの S+V+O 構文, 第 5 群は 'A good Boy likes to have a clean face.' (良い子は顔を清潔にすることを好む。) のような S+V+to 不定詞の構文である。文法的な説明はないが、こうした例文の提示には明らかに子供に構文 (syntax) を意識させる意図が認められる。初歩的な綴字教科書としては例外的なものであると言える。

第 3 の部分の 17 ページから文字のポイントがやや落ちて、文も 2, 3 行と長くなる。4~9 本の文で 1 区切りの合計 17 セクションある。最初の例文は 'If you would be wise and good, you must learn to read your Book.' (賢い良い子になるには、本を読むことを覚えなければなりません。) である。最初の 5 セクションは子供の日常生活に関する内容であり、読み方を覚えよ、寄り道やよそ見をせずに学校に通え、よく学び、よく遊べと諭される。それ以降は 19 ページの 'There is one God, He is great, and wise and good.' (神は

ただ1人であり、偉大にして賢明であり、また善良である。)を皮切りに、ごく簡単なキリスト教の教えの文が中心となる。ある程度読めるようになったらいきなり教理問答の文言や聖書の抜粋に進むのではなく、まず教訓的ではあっても日常的な話題から入り、次に同じようにわかりやすい日常表現を用いたリーディング練習を通して宗教的知識になじませてゆく。その後は、動物への虐待の戒めや、教会での過ごし方、礼拝の仕方など、子供に社会性を身につけさせるための内容の文が続く。やや複雑な構文を持った例文も含まれる。‘Nor is it kind and good to hurt poor dumb things, that can not speak and tell when they are hurt.’(傷ついても、それを話し告げることができない憐れな口のきけないものたちを傷つけることも思いやりのある正しい行いではない。)(22頁)接続詞 nor を文頭に持つ倒置文であり、関係詞節の前にコンマが置かれているが、文意から考えれば限定用法の関係代名詞 that を含んだ複文である。内容は日常的だが、‘poor dumb things’ という「動物」の比喩表現もあり、文語的である。後半に進むにしたがってやや長い文が増えるが、読みの難易度は基本的にはさほど変わらない。わかりやすい文をできるだけ多く飽きさせずに読ませることを第1目標としているのである。

良い男の子／女の子と悪い男の子／女の子の小話

27ページから巻末36ページまでは11の「良い男の子と悪い男の子の小話」である。1つの物語はおおむね10数行の1つから3つのパラグラフで書かれている。1話につき1人の貧しい男の子の行いが中心に語られる。心がけの良い子供とそうでない子供が対比的に描かれることが多い。第1話は、石を投げる癖のある男の子が友達の顔に怪我をさせ、街灯を壊し、別の友達の片目を失明させるという凄まじい話である。第2話はその続きで、前話の悪い子と対照的な、目を傷めた友人を介抱する良い子が描かれる。残りの9話でも1話ごとに良い子と悪い子が紹介される。2人の物乞いの子供のうち、1人は学校に上げてもらい読み方を覚えるが、もう1人はその機会を無にして物乞いを続け病気になる話(第3, 4話)、家畜を大切に扱う農場の少年と、飼い犬を虐待してきつい仕置きを受ける子供

の話（第6, 7話）。そのほかには、善意の人に衣食住を与えられ、やがて働くことを覚えて自ら立派に身なりを整えることができるまでに成長する子供の話（第9話）、神についての知識を持たなかった子供が、学校で読み方を学び、教会へも行くようになるまでに成長する話（第10話）などがある。

1818年刊の新版の女子用では巻末の小話集が「良い女の子と悪い女の子の小話」となっている。物語の数は9つで、それぞれは男子向けのものと比べてやや長い。おおむね30行ほどである。内容は男子向けとほぼ同様で、良い子と悪い子の対比である。勤勉、清潔、他者への思いやりなどが讃美される。読者対象の違いからくと思われる内容の違いは、幼い子供の面倒をよく見る少女と逆にそれらを虐待する少女が複数登場すること、学校で学ぶ内容として「読み方、綴り方」のほかに「裁縫、糸紡ぎ、編み物」が挙げられていること、清潔の美德がややより強調されている点などに認められる。「貧しい人々の友」（慈善家）に衣服を整えてもらいながら、だらしなくすぐに汚してしまう少女が、やがて不潔さから病気になり憐れに死んでゆく。（第6話）。

これらの話の基本となる教えは、学校に通い読み方を学ぶことの大切さ、勤勉や清潔の美德、動物虐待への戒めなどである。これらの文章の話題は読者と等身大の貧しい子供たちの日常生活からとったものであり、人物は類型化されている。慈善学校の生徒は身につけた綴字の知識をもとに、親しみやすい内容の文章で読みかたの練習ができる。

読解力と市民道徳

同書は児童の読解（reading comprehension）力の養成を目指すものであると言える。身近な話題のテキストを自ら読み、理解し、その内容を自分や周囲の人々の暮らしなどとの関係のもとに文脈的にとらえ、さらに読後感想を持つ、といった過程が想定されている。今日の英語教育における読解教育とその方法や目的に変わりはない。¹⁹ 機械的な暗記によるリーディング練習を批判するトリマーが考える指導法においては、教師は音読練習をさせたのち、生徒に読後感想を求め、内容の読解を通して道徳的な指導

をも行いうる。生徒は単にリーディングのスキルを学ぶのではなく、また逐条的に教理問答や聖書の記述を暗記するのでもない。聖書を正しく音読することを目的としていたリーディング教育が、道徳的な指導を介在させることで、むしろ読解教育としてそれ自体で十分に自立した性格を持つようになる過程を示すものであると言える。それを可能にしたのが、読解にふさわしい内容の現代性と、生徒の理解力に配慮したやさしい語彙や文を用いたテキストである。

さらに、著者がこれらの読者にふさわしい内容と考えるのは、身近な話題であることと同時に、読者が理解し身につけるべき社会道徳に即したものであることであった。この場合の社会道徳は、主として社会階層に基づく政治理念を背景に持つものである。下級労働者に期待される勤勉、衛生観念、あるいは動物虐待に象徴される粗暴な振る舞いの抑制などが繰り返し説かれる。トリマーはのちに『慈善の節約』増補版のなかで、近年、奉公人や従業員の不誠実さが目につき、また強盗、窃盗、放火などを行う者さえ多いことに言及し、それを幼少年期における教育の欠如によるものとしている。「不服従の精神が貧民のあいだにはびこり、彼らを統率のきかない存在にし、国家の安全を脅かしている」とし、次のように論じている。

こうした悪行（中略）の原因の大部分は幼い頃の教育の欠如にある。その結果として、若い男女の大部分が自分たちの身分にふさわしい義務をわきまえないままに社会に出てしまうのである。それゆえ、貧困児童の教育を彼らの無知で墮落した両親に任せておいてはならないのである。²⁰

貧しい人々の非行や反抗が「国家の安全を脅かす」とする思想は、およそ100年前にすでに見られた。慈善学校を支援したアイザック・ウォッツにも、また不服従の精神を育てるとして貧民教育に反対したバーナード・ド・マンドヴィルにも、ともに認められるのである。19世紀に入っても、1807年の教会区立学校法案に反対する科学者で下院議員のデイヴィス・ギルバートに見られた。²¹ ウォッツとトリマーに共通するのは学校に通い

読み方を学ぶことの大切さがまず説かれることである。それが社会道徳を理解するための基礎となると考えられているからである。学ばれるべき内容としては、世俗の社会道徳が教条的なキリスト教知識を凌いでいるのである。人々を貧困や犯罪から救済し、社会に安定をもたらすために慈善を最も効果的に活用する方法が、彼らに読み書き能力を与え、それによって身分をわきまえた市民道徳を身につけさせることであった。

初期の入門的な英語教科書で学ぶ生徒は、アルファベットと音節および分節の基本を覚えたあとは、聖書からの抜粋などを教材に読み方の練習をした。²²トバイアス・エリスの『英語学校』(1670)の副題には「ご神託の主たる原理とそれを証明する聖書各節の十分な引照」付きとの文言が見られる。エドワード・コカーの『熟練教師』(1696)²³でも、アルファベット、母音字、子音字の説明のあと、すぐに福音書からの引用、祈祷、信条などが続く。イアン・マイケルによれば、もっぱら教条的なテキストを含む綴字教科書は1760年代まで見られたという。その一方、聖書からの引用などのほか、寓話や道徳的な物語などを含むものも増えていた。²⁴トリマーの批判以前から教条的な内容のテキストのみの教科書は少なくなっていたと考えられる。とは言え、トリマーに必要なのは、初めて読み方を学ぶ18世紀末の、特に貧しい子供にふさわしいごく入門的でわかりやすい内容の教科書であった。読者の身の回りに起こりそうなできごとを話題に、単音節語だけを用いた読みやすいテキストを付したこの本は、まさしく慈善学校や日曜学校の生徒たちにふさわしいものであった。

綴字教科書としての同書の現代性は、1. 主として日曜学校で学ぶ貧困児童という新たな特定の読者を想定していること、2. 読者対象を男子に限定していないこと、3. 男女別テキストの内容に読者の性別による偏向はあるものの、一定の相称性が認められること、4. 生徒たちの現代生活を題材としたテキストを用いていること、5. 単音節語に限定した難易度がほぼ一定の複数のテキストによって無理なくリーディング練習ができること、6. 「読解」の練習が目指されていることなどである。

『慈善学校スペリング・ブック』第2部と伝統への回帰

『慈善学校スペリング・ブック』第2部も初版が見出されておらず、その刊行年は定かではない。マイケルはノッティンガム大学図書館所蔵の1794年刊行の第2版を確認しており、同年ないしそれ以前と推定している。²⁵ ブリティッシュ・ライブラリー所蔵の最も古いものは1798年の第4版である。判型は第1部と同じである。1818年の新版（架蔵）がある。第2版はトマス・ロングマン、第4版は第1部の第5版と同じくフランシスとチャールズ・リヴィングトン、新版は第1部と同様リヴィングトン一族の出版である。先に見た92年のトリマーの日記の記述を見ても、第1部と2部を異なった時期に分けて執筆・刊行した形跡がないことから、92年に第1部と同時にほぼ同時に刊行されたものと考えられる。²⁶ とはいえ、両者は1つの内容のものを分冊化したというより、それぞれ別個の書として独立した編集がなされている。

きわめて初歩的な綴字教科書である第1部に対し、第2部は綴字知識の完成を目指す上級向けの内容となっている。第1部では単音節語だけが学ばれたが、第2部では一挙に2音節から7音節までの語が学ばれる。それとともに、宗教教育の内容が見られなかった第1部に対し、第2部はあくまでも生徒に聖書を読みこなすのに必要なスキルと知識を与えようと意図されたものである。実践的なリーディング練習の素材として、教訓的寓話、教理問答、祈祷、讃美歌などが収められている。それらはもちろん単なるリーディング練習の教材ではなく、理解し身につけるべき宗教知識を生徒向けにまとめたものである。その意味では、聖書の抜粋や教理問答を素材とする従来のスペリング・ブックと同じである。

同書には目次は付されていない。しかし全162ページの内容は豊富で、さまざまな項目から成っている。

1. 「序」では音節とは何かの説明、2. 2音節語の一覧（4-17頁）、3. 2音節語を用いた数行から20数行までの少年少女の日常生活を話題としたリーディング練習用の文章30本（17-32頁）、4. 3音節語集（32-38頁）、5. 4音節語集（38-41頁）、6. 5音節語集（41-42頁）、7. 「語末2音節が ti-on や si-on で、shon という単音節音になる語」一覧（42-44頁）、

8. 5, 6, 7 音節語集 (44-45 頁)。単語集のコラムは 33 語が基本で, 1 ページに 3 コラムずつである。たとえば 2 音節語は 1,257 語である。9. 「教訓的寓話」18 話 (46-62 頁)。各寓話にイソップ童話などに伝統的にみられる教訓 (Moral) が付されている。10. 分節化した歴史的人名と地名の一覧 (62-69 頁)。人名では Ni-co-de-mus や Ze-pha-ni-ah, 地名では He-li-o-po-lis, Je-ho-va-shal-lom のような, 聖書や歴史書に出てくる難しい語がほとんどである。11. 聖書中の人名が出てくる 22 の文章 (69 頁-95 頁)。「読みながら語を分節しなさい」との指示がある。今日の視点からすればとんでもなく難しい固有名詞を含む。

Who came with Zerubbabel; Jeshua, Nehemia, Azariah, Raamiah, Nahamani, Mordecai, Bilsham, Mispereth, Bigvai, Nehum, Baanah, the number, I say, of the men of the people of Israel, was this:

The children of Parosh, two thousand an[d] hundred seventy and two.
(p. 89)

12. 新約各福音書に用いられている固有名詞をはじめとする語彙集 (96-111 頁)。各書の章ごとに一括りになっている。たとえば『マタイ伝』第 2 章の語彙は, 'Bethlehem, Judea, Herod, Jerusalem, governor, Egypt, Rama, lamentation, Rachel, Archelaus, Galilee, Nazareth.' (p. 96) である。13. アラビア数字とそれに対応する数詞, および読み方の練習用にややランダムに並べられたアラビア数字一覧 (112-13 頁), 14. ローマ数字と数詞, およびややランダムに並べられたローマ数字一覧 (114-15 頁), 15. 「聖書について」は, 聖書 (Bible), 旧約聖書, 新約聖書, 聖書外典 (Apocrypha) の説明 (116 頁)。16. 旧約聖書 39 書, 新約聖書 26 書, 聖書外典 13 書の各目次 (117-18 頁), 17. ABC 順の聖書などの頻出語積集 (119-33 頁)。「ASCEND, to go upwards」(ASCEND, 登る) から始まり, 'ZEAL, a warm regard for religion, and the honour of God.' (ZEAL, 信仰と神の栄光への熱い思い) で終わる。18. 句読法解説 (134 頁), 19. 教理問答 (135-46 頁), 20. 12 の祈祷 (147-55 頁), 21. 讚美歌 3 篇 (156-58 頁), 22.

日曜学校のための讚美歌 4 篇（159－62 頁）。

単語集、寓話、聖書中の語彙集、数字、句読法、教理問答、祈祷、讚美歌などの項目はスペリング・ブックに伝統的に見られるものである。いずれの項目にも特別な新しい工夫は認められない。この綴字教科書で現代的なのは、第 1 部と同様、貧しい子供の現代生活に材をとったテキストによる読解練習が含まれている点である。リーディング練習を通して、読者の社会的な立場についての認識や日々の暮らしへの反省を促す内容となっている。その他の項目を見ると、あたかも上級生向けのキリスト教知識の暗記帳のようで、スペリング・ブックの域を逸脱している観がある。第 1 部が読者である慈善学校の幼い生徒の理解力に十分に配慮した、いくつかの現代的な創意を含んだものであったのに対し、第 2 部は宗教的な教材による聖書読解のための伝統的な教科書へといわば回帰しているのである。

第 2 部の教育史における評価

トリマーは聖書のなかの難しい表現を含む教材を用いた暗記中心の教育を再三批判していた。トリマーは『慈善学校児童教育考』や『慈善の節約』増補版などで、「子供の能力をはるかに超えた丸暗記の訓練」の愚と、当初の慈善学校にはあった「口頭による教育」の衰退を指摘した。しかし、複数の教育史家がつとに指摘するように、実は『慈善学校スペリング・ブック』第 2 部の指導法はトリマー自身のそうした批判から免れていないように見える。教育史などにおけるトリマーのスペリング・ブックについての言及はほとんどが第 2 部のこうした旧弊とも評される編集に対する疑問ないし批判である。

たとえば『慈善学校運動』の著者 M・G・ジョーンズは、18 世紀末の慈善学校におけるリーディング教育について論じた部分で、教理問答や祈祷などの機械的な暗記中心の教育に対するトリマーの批判を引用している。新約聖書の読み方では何より「正確な音読の上達」が優先され、教理問答は宗教知識の暗記試験のためのものになってしまっていることを論じる『慈善学校児童教育考』の一節である。その一方でジョーンズは、『慈善学校スペリング・ブック』の指導法は、トリマー自身が非難する欠陥を免れ

ていないと言う。「第2部では、子供たちは2音節語を学ぶと、寓話に形をとった教訓話を経て旧約聖書に進み、そのなかの地理による次のような固有名詞の発音練習が延々と続く」とし、'And they went from Mithcah, and pitched in Hashmonah.' (彼らはミスカを出て進み、ハシュモナに泊まった。)などに始まる3行を引用している。またジョウゼフィーン・カームは女子教育史の名著『引き延ばされた期待』で慈善学校教育の刷新に奮闘した人物としてトリマーを取り上げ、その著書がSPCKによって大量に流布したことを紹介している。その際、そのスペリング・ブックに言及し、トリマー自身が一掃しようとした慈善学校教育の欠陥を、同書がむしろ恒久化する役割を果たしたことの奇妙さに論及している。²⁷

トリマーは『慈善学校児童教育考』のなかで、すでに多くの類書があるにもかかわらず自ら綴字教科書を執筆した理由を説明している。翌1793年に刊行される『教師の手助け』2巻で推奨する指導法に見合う書が見当たらなかったためであると言う。特に、聖書を流暢に読むために必要な固有名詞の読み方を練習できるものがなかったと言う。ヒースは第2部の内容が聖書の知識に偏重しているのは『教師の手助け』の特に第2巻と連動して、上級生向けのリーディングの指導を行うためであったとしている。²⁸ トリマーには教科書とそれに準拠した教師用手引書を整備することで指導法を規範化する意図があったと考えられる。

『教師の手助け』第1巻、第2巻

『教師の手助け』の2巻とも初版は不詳である。P・M・ヒースの書誌では1793年刊行とされている。²⁹ ミシガン大学所蔵の1812年刊の第1巻の第7版、1810年の第2巻の第6版を見ることができる。³⁰ 版元はリヴィングトン一族である。両巻頭に、初版の読者から多くの教師には内容が難し過ぎたり、不要な部分があるなどの指摘を受けて改訂したとの断り書きが付されている。第1巻の48ページまでが『慈善学校スペリング・ブック』の第1部に、それ以降と第2巻が第2部に準拠している。各単元、各セクションを用いて日曜学校や慈善学校の教師がどのように指導するかを示したものである。

まずその日に学ぶ内容を教師が講義し、その後、それについて教師と生徒が教理問答の形式で質疑応答してゆく。想定される生徒の答えが示されているが、「一字一句同じ答えをさせるのではなく、自分の言葉で意味が伝わるように答えさせればよい」と言う。(1頁) 質疑応答は詳しく逐語的であり、幼い生徒がテキストの内容を十分に理解できるように、日常的なわかりやすい言葉で問いただしてゆく。教訓的な小話についての間答(29-63頁)は、たとえば次のようである。Q「貧しいラルフ・バンクスがお父さんを亡くすのは悲しいことですよ」A「はい。」、Q「彼は何を恐れたと思いますか」、A「飢えてしまうことです。」(46頁) 読解内容を生徒の言葉で聞き出してゆくのである。

一方、スペリング・ブック第2部に対応した第1巻の残り部分と第2巻は、必ずしも逐一スペリング・ブックの内容に沿っているわけではない。聖書、教理問答、祈祷、教会での礼拝、その他の宗教行事等についての各講義と質疑応答、そして聖書からの頻出語語彙集に対応した問答がそれぞれまとめられている。教理問答そのものは慈善学校で多く用いられたジェイムズ・トールボットの『言い換え教会教理問答』(1705)と同じ伝統的なものである。トールボットが難しい言葉を別の表現に言い換えるなどしてわかりやすくしているのに対し、『教師の手助け』には理解を深めるための「指導」(Instruction)が各講義の冒頭のほか適宜加えられている。

『教師の手助け』は、日曜学校と慈善学校双方の教師の指導手引き書である。聖書の理解は慈善で運営される学校における宗教教育の終極的な目的であると同時に、リーディング教育の達成目標でもあった。特に新約聖書はいわば初等段階における最上級のリーディングのテキストであった。³¹ トリマーには『教師の手助け』に示した指導法に見合う、聖書についての豊富な知識を確実に理解のもとに修得させるための教科書が必要であった。第2部を見ると、たしかに慈善で学ぶ生徒の多くの「子供の能力をはるかに超えた丸暗記の訓練」が必要と思われるような内容になっており、同書に対する歴史家たちの辛い評価は説得的である。ただし、『慈善学校スペリング・ブック』第2部が旧来のものと類似の編集となっていることと、『教師の手助け』が慈善学校教育の現状に対する批判から生まれたもので

あることには必ずしも矛盾はない。トリマーが批判するのは教育内容ではなく、その具体的な指導法である。『教師の手助け』に沿って「口頭による教育」を行うことで、丸暗記による暗唱によらない指導が可能となる。トリマーの指導がどれだけの実績を上げたかは彼女自身の報告以外からは計測しがたい。しかし、スペリング・ブックと『教師の手助け』の双方が、トリマー自身の要請もあり SPCK の推薦図書リストに載ったことで、トリマーの方法が世紀をまたいで一定数の学校で実践されたことはたしかであろう。³²

18 世紀綴字教科書の完成形

トリマーの『慈善学校スペリング・ブック』第1部、第2部の内容や指導法は、基本的には慈善学校で草創期から用いられていたものを踏襲したものとと言える。熱心に地元の慈善学校や日曜学校を訪ね、貧しい子供の学習にふさわしい綴字教科書のあり方を模索しただけに、第2部には問題が指摘されるも、過不足のないバランスの良い編集が行われているという印象を受ける。その意味で、両書は、まさしく慈善学校綴字教科書の完成形と言ってもよい。特に第1部は、幼い子供の能力や嗜好に配慮した、わかりやすく簡潔な内容となっている。しかし同書の英語（国語）教科書としての現代性はむしろ別のところにある。それは同時代の貧しい子供たちを描いたテキストを含んでいることである。生徒自身がその内容を自らの身の上と照らし合わせて読解することで、市民道徳を理解できるようにするという政治的な配慮が認められる。

一方、教師の指導の手引書と併用するという指導法の刷新は、多くの学校で、多くの教師が、大勢の生徒を指導する、来るべき大衆教育時代に備えたものと言える。多くの教師たちの能力は一樣ではなく、彼／彼女等には手引書による模範的な指導方法の伝授がぜひとも必要であった。

先に触れたように、やがてトリマーは『新教育案の比較研究』を発表してランカスターの助教法を批判し、その一方で同時期にイングランド国教会牧師アンドルー・ベルが試みたそれをより生徒と教師の関係が密であるとして評価し、自らの日曜学校で実践した。しかしやがて、『女性と若い

国民の形成』の著者メアリー・ヒルトンが言うように、トリマーが貧しい者たちのための慈善による学校運営の母体としてとらえていた「敬虔で意識の高い地元のジェントリーによって治められる教会区という小規模な社会経済的単位は、工場システムを前に浸食され」、*「教会区学校は産業化、機械化の到来によって、経済的にその維持ができなくなった。」*³³ 急激に増大する労働者階級の子供のための学校は19世紀に入るとランカスター派のイギリス内外学校協会（The British and Foreign School Society）、ベル派の国民教育協会という2つのヴォランティアズムによる組織を軸に全国規模で新たに編成されてゆく。SPCKが関与して設立された学校の多くは国民教育協会校として引き継がれた。もちろんこの間の事情は本書の論題の範囲を越える。³⁴ ただし、そうした時代にあって、慈善学校における伝統的な「口頭による教育」の復活は、言わば困難を前提に提唱されたものであったことは確かである。一方で『慈善学校スペリング・ブック』による綴字指導が、トリマーの「新教育案」に含まれる助教法（*monitorial system*. 上級生が助教性生（*monitor*）として下級生を教える学習指導法）においても応用されたことは、同書がまさしく民衆英語＝宗教教育の過渡期に登場した書であることを意味する。いくつかの大きな革新的要素を含みながら、あるいは含むことで、『慈善学校スペリング・ブック』は、草創期の慈善学校に見られた献身的で熱心な教師による英語＝宗教教育の復活を目指す、すぐれて保守的な教育思想を反映したもののなのである。

追記 本稿は2024年度成城大学特別研究助成（研究課題「ピューリタンの教育改革論と語学教育」）に基づく研究成果の一部である。

注

- 1 *Some Account of the Life and Writings of Mrs. Trimmer, with Original Letters, and Meditations and Prayers, Selected from her Journal*, 2 vols (London, 1814), I, pp. 140-41.
- 2 Mrs. [Sarah] Trimmer, *Fabulous Histories, Designed for the Instruction of Children, Respecting their Treatment of Animals* (London, 1786); *The Guardian of Education, a Periodical Work; Consisting of a Practical Essay on Christian Education*, 5 vols (London, 1802-06), II (1803), 185-86. トリマーの妖精物語批判に見られる子供の読書の政治性への認識については、拙著『マザー・グースとイギリス近代』（岩波書店、2005）、第3章および同『イギリスの忘れ

- られた子供の本』(朝日出版社, 2023)の第5章(初出, 拙論「妖精物語の残酷性」(Otsuka Review, 22号, 1986年8月, 51-58頁), 同「革命論争と妖精物語論争——トリマー夫人と勃興期のイギリス児童文学」(山形和美編『聖なるものと想像力』下巻, 彩流社, 1994))を見よ。
- 3 これまでで最も包括的な研究はロンドン大学に提出された博士論文をもとにした P.M. Heath, *The Works of Mrs. Trimmer (1741-1810)* (Saarbrücken, 2010) である。わが国ではトリマーの教育論の再評価をめぐる岩下誠の2つの優れた論考「モニトリアル・システムの条件と限界——サラ・トリマーの教育思想と教育実践を通じて」(日本教育学会『教育学研究』73巻, 1号, 2006年, 27-38頁), 「政治的保守主義と教育的革新主義のあいだ——サラ・トリマー再評価論をめぐる一考察」(神宮輝夫, 高田賢一, 北本正章編著『子どもの世紀—表現された子どもと家族像』ミネルヴァ書房, 2013)がある。
 - 4 Mrs. Trimmer, *The Economy of Charity; or, An Address to Ladies Concerning Sunday-Schools; the Establishment of Schools of Industry under Female Inspection; and the Distribution of Voluntary Benefactions* (London, 1787), あるいはその増補版 *The Oeconomy of Charity; or, An Address to Ladies; Adapted to the Present State of Charitable Institutions in England*, 2 vols (London, 1801) 第1巻の, それぞれ補遺中の同校設立に関する報告を参照。
 - 5 Sarah Trimmer, *The Charity School Spelling Book. Part I. Containing the Alphabet, Spelling Lessons, and Short Stories of Good and Bad Boys, in Words of One Syllable Only*, 5th edn (London, 1799), *The Charity School Spelling Book. Part II. Containing Words Divided into Syllables, Lessons with Scripture Names, &c*, 4th edn (London, 1798). いずれも初版は未見。
 - 6 小論の筆者が見たものは [Sarah Trimmer], *The Little Spelling Book for Young Children*, 4th edn (London, 1791), [Sarah Trimmer], *Easy Lessons for Young Children*, 2nd edn (London, 1790)。初版発行年は Heath のトリマー著作目録などによる。拙論「2, 3歳児から始める——バーボルド夫人とトリマー夫人の読み書き教育」(『社会イノベーション研究』18巻, 1号, 2019, 29-35頁)を見よ。
 - 7 Heath, p. 224 を参照。
 - 8 Sarah Trimmer, *An Easy Introduction to the Knowledge of Nature, and Reading the Holy Scriptures* (London, 1780); Mrs. Trimmer, *Sacred History Selected from the Scriptures*, 6 vols (London, 1782-85)。
 - 9 *Some Account of the Life and Writings*, I, p. 111.
 - 10 Trimmer, *Economy* (1787), p. 37.
 - 11 Mrs. Trimmer, *Reflections upon the Education of Children in Charity Schools; with the Outlines of a Plan of Appropriate Instruction for the Children of the Poor* (London, 1792)。
 - 12 同時代の慈善教育の展開については M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (Cambridge, 1938), pp. 160-61, および拙著『イギリス近代の英語教科書』(開拓社, 2021) 序論, 第1章を見よ。
 - 13 Mrs. Trimmer, *Oeconomy of Charity; or, An Address to Ladies; Adapted to the Present State of Charitable Institutions in England*, 2 vols (London, 1801), I, pp. 48-49; *A Comparative View of the New*

- Plan of Education Promulgated by Mr. Joseph Lancaster, in his Tracts Concerning the Instruction of the Children of the Labouring Part of the Community; and of the System of Christian Education* (London, 1805), pp. 145-46. 慈善学校批判の文脈で長期にわたって用いられた「オウム返し」の比喩については前掲の拙著『イギリス近代の英語教科書』第3章で紹介した。トリマーのランカスター批判については、前掲の岩下「モニトリアル・システム」に詳しい。
- 14 *Some Account of the Life and Writings*, I, pp. 295, 296.
 - 15 Mrs. Trimmer, *An Abridgement of Scripture History; Consisting of Lessons Selected from the Old Testament* (London, 1793), *An Abridgement of the New Testament; Consisting of Lessons Composed from the Writings of the Four Evangelists. For the Use of Schools and Families* (London, 1793); Sarah Trimmer, *Reflections upon the Education of Children in Charity Schools: With the Outlines of a Plan of Appropriate Instruction for the Children of the Poor* (London, 1792), *The Teacher's Assistant; Consisting of Lectures in the Catechetical Form: Being Part of a Plan of Appropriate Instruction for the Children of the Poor*, 2 vols (London, [1793]).
 - 16 *Some Account of the Life and Writings*, I, pp. 320, 298.
 - 17 H. R. Plomer, G. H. Bushnell and E. R. McC. Dix, *A Dictionary of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England Scotland and Ireland from 1726 to 1775* (Oxford, 1932; repr. 1968), p. 214 を参照。
 - 18 Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), p. 585 を参照。Michael は第1部をもともと *The Little Spelling Book* として刊行されたものであるとする C. W. J. Higson の説が誤りであることも示唆している。
 - 19 現代の英語教育における reading comprehension については Dominic Wyse and others, *Teaching English, Language and Literacy*, 3rd edn (Abingdon, 2013), pp. 155-61 を参照。
 - 20 Trimmer, *Oeconomy* (1801), I, pp. 11-12 を参照。
 - 21 Davies Gilbert の意見については John Rule, *The Labouring Classes in Early Industrial England, 1750-1850* (London, 1986), pp. 234-35 を参照。
 - 22 前掲の拙著『イギリス近代の英語教科書』第2章を見よ。
 - 23 Tobias Ellis, *The English School: Containing, a Catalogue of All the Words in the Bible*, 5th edn (London, 1680); [Edward] Cocker, *Cockers Accomplish'd School-Master: Containing Sure and Easie Directions for Spelling, Reading, and Writing English* (London, 1696).
 - 24 Michael, pp. 160-61 を参照。
 - 25 Michael, p. 585 を参照。
 - 26 Heath も第1部と2部を分けずに92年の刊行としている。Heath, p. 291 を参照。
 - 27 Jones, pp. 83-84; Josephine Kamm, *Hope Deferred: Girls' Education in English History* (London, 1965), pp. 89-90 を参照。
 - 28 Trimmer, *Reflections*, p. 39; Heath, pp. 84-85 を参照。
 - 29 Heath, p. 291 を参照。
 - 30 Mrs. Trimmer, *The Teacher's Assistant: Consisting of Lectures in the Catechetical Form*, I, 7th edn

- (London, 1812), *The Teacher's Assistant: Consisting of Lectures upon the Catechism of the Church of England and the Common Prayer*, II, 6th edn (London, 1810).
- 31 慈善学校教育における聖書の読解については前掲の拙著『イギリス近代の英語教科書』第10章を見よ。
 - 32 SPCKの1793年3月5日の議事録に、トリマーから同協会に宛てて近著を推薦図書リストへの掲載依頼の書簡があったことが報告されている。Cambridge University Library, SPCK.MS/A1/31, Minutes of the SPCK, p. 128。それに先立ってトリマーは評議委員のSamuel St. Davidに自著を送付し、次回の議事にその件を取り上げるとの1月28日付けの返事を得ていた。*Some Account of the Life and Writings*, II, pp. 39-40を参照。
 - 33 Mary Hilton, *Women and the Shaping of the Nation's Young: Education and Public Doctrine in Britain 1750-1850* (Aldershot, 2007), p. 149を参照。
 - 34 2つの教育振興組織下の民衆教育については、たとえばNancy Ball, 'Introduction: Voluntary Schooling Established', in *Educating the People: A Documentary History of Elementary Schooling in England, 1840-1870* (London, 1983)を、また19世紀イギリスの公教育におけるヴォランティアの意義については、岩下誠「イングランド公教育史のなかのヴォランティアム——研究成果の総括と展望」(『日英教育フォーラム』15号, 2012年, 51-63頁)を見よ。

図版出典

- 図1 *Britain in the Hanoverian Age 1714-1837: An Encyclopedia*, ed. by Gerald Newman (New York, 1997).
- 図2 Sarah Trimmer, *The Charity School Spelling Book. Part I*, 5th edn (London, 1799). British Library.
- 図3 Sarah Trimmer, *The Charity School Spelling Book. Part II*, 4th edn (London, 1798). British Library.